

わくわく 中国文化



重陽の節句

— 九月初九・重阳节 —

中国と日本の違い

(chóng yáng jié)



重陽の節句は、毎年太陰暦（旧暦）の9月9日になる中国の伝統的な節句です。「九」という奇数は、「易経」という中国の古典書物に陽の数であり、「九九」という二つの陽数の極が重なり合うことから「重陽」と呼ばれます。また、月と日の数字9が重なることから、「重九」とも呼ばれます。「九九归真，一元肇始」は、九九は一に戻り、一はすべての始まりであるという意味です。古代の人々は、9月9日の重陽が縁起の良い日だとされています。

重陽の節句は、上古に始まり、前漢に広まり、唐の時代以降栄えるようになってきました。昔、民間では重陽の節句に人々は、郊外の山や丘など高い場所へピクニックに出かけ遠くを見たり、幸福を祈ったり、呉茱萸の実を入れた袋を肘に下げたり頭に飾ったり、神様や先祖を祀ったり、菊の香りを移した「菊酒」を飲んで邪気を払い無病息災や長寿を願ったりしていました。重陽の節句は、現在まで伝承されて、年配者への敬意などの意味も新たに込められています。高い場所を登って秋を味わうこととお年寄りを敬うことは、現代の重陽の節句の重要な二つのテーマです。

登高处
是重阳
佩茱萸

茱萸 (zhū yú)

呉茱萸（ゴシュユ）中国中～南部に自生する落葉小高木。生薬の一種で独特の匂いと強い苦みを有します。殺虫消毒・寒気を取り除く効果があります。

古代では祭祀・飾り・薬用・魔除けとして使われていました。



九月九日，佩茱萸，食蓬餅，飲菊花酒，云令人長壽。



呉茱萸を挿す



呉茱萸と呉茱萸の実を入れた袋



菊酒を飲む

《九月九日忆山东兄弟》
唐：王维
独在异乡为异客，
每逢佳节倍思亲。
遥知兄弟登高处，
遍插茱萸少一人。

九月九日山東の兄弟を憶（おも）う
王維（おうい 701～761）
異郷に独り 異客となり
佳節のたびに 親兄弟たちを思う
登高の兄弟たちよ 遥か知る
呉茱萸挿すなかに われあらざるを

《九月九日登玄武山》
唐：卢照邻
九月九日眺山川
归心归望积风烟
他乡共酌金花酒
万里同悲鸿雁天

九月九日玄武山に登る
盧照隣（ろしょうりん 637～689）
九月九日 山川を眺む
帰心帰望 風煙積む
他郷共に酌む 金花の酒
万里同じく悲しむ 鴻雁の天

日本の重陽の節句

日本で太陽暦（西暦）9月9日は「重陽の節句」です。

「重陽の節句」は平安時代の初めに中国より伝わりました。日本では、平安時代の初めに宮中行事の1つとなり、菊を眺める宴「観菊の宴」が開催されたり菊を用いた厄払いなどが行われたりしました。また、時代とともに菊の風習は庶民の間でも広がり、江戸時代には五節句の1つとして親しまれる行事になっています。

重陽の節句では、菊を鑑賞しながら「菊酒」を飲むと長寿になると言われています。菊酒は、蒸した菊の花びらを器に入れ、冷酒を注ぎ一晩置くことで香りに移して作ります。菊料理にも、蒸した後に乾燥させた菊の花びらを使用していました。現代では、菊の花びらを散らした盃に冷酒を注いで飲むことが主流です。また、重陽の節句は作物の収穫時期と重なるため、庶民の間では「栗の節句」として「栗ごはん」を食べて祝っていました。

さらに、「くんち（九日）に茄子を食べると中風にならない」という言い伝えもあります。「くんち」とは、収穫を祝う秋祭りの総称の1つです。旧暦の9月9日、重陽の節句の際に行われた祭りであることから、「九日（くんち）」の名前が定着したと言われています。九州で行われる「長崎くんち」や「唐津くんち」はその名残です。現在では、毎年新暦の10月に行われています。重陽の節句に「茄子の煮びたし」や「焼き茄子」などの茄子料理を食べ、不老長寿や無病息災を祈りました。

